

固定住居「バイシン」の間取りと住まい方に見られる 現代モンゴル人の住意識に関する分析

—モンゴル国ウランバートル市「ゲル地区」における定住型住居の実態調査から—

大井 勇人（指導教員 八尾 廣）

1. 研究の背景と目的

1-1. 研究の背景

モンゴル国は、東アジア北部に位置する人口 280 万人（2012 年時点）、面積約 1,565,000k m² の国家である。首都ウランバートル市の人口は約 129 万人（人口の約 45%）で、トブ県の中央北部に位置している。

調査対象となる「ゲル地区」は、ウランバートル市の北方及び東西の谷筋に拡大する中・低所得者（世帯収入は月 50 ドル以下が 60% を占めている）が密集して住むエリアである。多くの世帯が敷地の内部にバイシン (*baishin*) と呼ばれる固定型住居とゲル (*Ger*) と呼ばれる伝統的な移動住居を併用し暮らしている。ゲル地区は、1992 年の市場経済導入移行拡大を続け、都市インフラの未整備、石炭ストーブからの煤煙による大気汚染、下水道の不備による土壌汚染等の環境問題が深刻となっている。冬季は 9 月から 5 月までと長く、最低気温は -40℃ にもなるため、主に暖房と発電用に年間約 5,900 千 t の石炭を燃焼しており、煤煙は盆地状の地形に溜まり住民の健康にも深刻な被害を及ぼし始めている。

1-2. 本研究の目的

本論では、詳細な実測調査により得られた間取りと住まい方に関する住民へのヒアリング調査に基づき、ゲル地区の定住型住居の実情と主として住宅内で展開される住生活の実態を把握する。今回の調査では対象とした 25 住居のうち 23 件がセルフビルドによるものであった。中・低所得者の住民が各々に間取りを考え、資金の貯蓄ができるごとに少しずつ資材を購入し、住まいを整えていくケースにも多く出会った。自力建設であるが故に、間取りのあり方、構法、建材も一件ごとに異なるが、25 件の実測図及びヒアリング結果を俯瞰して見ると、その中に共通する間取りのあり方や住まい方が見えてくる。実測調査による平面の分析とヒアリング結果から見える住民の住まい方に焦点をあて、ゲル地区に共通する住まいのあり方、住生活に関する意識の抽出を行うことを目的とする。

1-3. 調査概要・方法

・調査日程：

夏季調査：2013 年 9 月 1 日～9 月 16 日

冬季調査：2013 年 12 月 22 日～12 月 30 日

・調査方法：

ウランバートル市ゲル地区にて、ゲル地区開発局の協力のもと、実測調査及び主として住まい方に関する詳細なヒアリング調査を全 25 件の住居を対象に行った。主なヒアリング内容は以下の 4 項目に分けられる。冬季調査では夏季調査を行った住居の一部を再訪し、ヒアリングを補完すると共に、夏季と冬季の生活の違いを把握した。

- ① 世帯主の名前、全家族の世帯主との関係及び年齢、職業、世帯収入及びその支出内訳等の基本属性に関する情報
- ② [食事、料理、団らん、就寝、読書・勉強、化粧、接客] の 7 つの生活場面が行われている住居内の場所とその生活場面における姿勢、といった、住まい方に関する情報
- ③ ゲル居住文化や伝統に関する認知度及び現代の生活への反映に関する住民の意向
- ④ 将来住みたいと思う住宅像及び入手可能な住居価格

実測調査にはレーザー距離計、巻き尺、方位計、水平器を用い、敷地形状、建物配置、住居平面や高さを実測し平面図、断面図、配置図を作成した。

2. 固定住居バイシンの概況

・規模、階数

調査対象の住居の規模は平均延べ床面積 67.38 m²（最小 31.91 m²、最大 207.13 m²）であった。27 家屋中 21 家屋は平屋建てであったが、残りの 6 家屋中 2 階建ては 2 住居、その他は屋根裏部屋を持っていた。

・間取り

全ての住居の生活の中心は1階であるが、1階の間取りはワンルームから最大4部屋に分かれるタイプまでであった。暖房方式により間取りに大きな違いが見られる(後述)。下水道がないためトイレは別棟とし、住居からなるだけ遠い位置に設置される。全ての住居に浴室はなかった。

・暖房方式

全ての住居に暖房があるが冷房はない。旧式のストーブまたは、自作のカマド付きの住居はペチカと呼ばれるレンガの放熱壁を持つが、新しい高効率型石炭ストーブがある場合はペチカを持たず、単独でストーブが置かれる。調査した27件中3件は、ストーブで沸かした湯をパイプで各室のラジエーターに引き暖房を行う給湯暖房方式を用いていた。熱源である石炭ストーブは間取りへの影響が非常に大きく、特にペチカは厚さ350mm-400mm、長さ2-4m程度の大きさがあり間仕切としての性質を持つため、間取りの分析においては暖房設備の影響を考慮する必要がある。

・窓、家具の配置

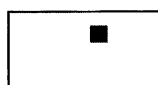
窓の大半は南側に設けられ、太陽光を積極的に室内に取り入れていた。全ての住居において、家具は部屋の辺またはコーナーに置かれ中心を広く空ける傾向にあった。各部屋の仕切り方は、扉を設けている場合や扉を取り外している場合または、壁やペチカによって隔てられている場合がある。いかに家全体を暖めるかという問題や、家族間のつながりの様子によって、住居ごとに多様な変化が見られた。

3. バイシンの間取りの分析

3-1. 間取りのタイポロジー

バイシンの多くは矩形平面の類型をとり、主体構造の外部に付室として風除室(彼らの呼称は玄関)をもつ形式である。付室(風除室や店舗)を除いた主体構造の平面形には一定の傾向があり、暖房設備・空間分割の方法により分類すると、下図のようにA) -E)に分けられる。空間分割は扉付きの壁、開口部のある壁、袖壁等によるがこれを点線として表記し、ペチカを黒い長方形、高効率ストーブを小さな黒い正方形で表記した。

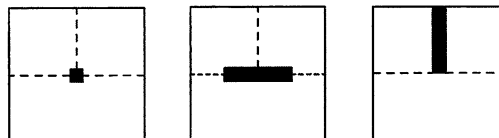
A) ワンルーム型



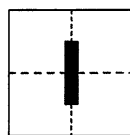
B) 二分割型



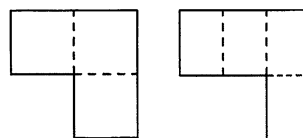
C) 三分割型



D) 四分割型



E) L時平面型



A) A1 : No. 05
B) B1 : No. 01、No. 14 B2 : No. 07-1、No. 07-2、 No. 07-3 B3 : No. 08、No. 10、No. 17、No. 21
C) C1 : No. 15 C2 : No. 06、No. 18、No. 19、No. 22、 No. 24、No. 25 C3 : No. 16
D) D1 : No. 04、No. 09、No. 13、No. 23
E) E1 : No. 20 E2 : No. 12

3-2. ダイアグラム

調査した全住居27件の間取りのダイアグラムを抽出し分析する。室名はヒアリングから得られた住人による室名称を用いた。

3-2-1. 「単純型」と「副室型」の分類

殆どのバイシンでは、【玄関（+倉庫）-キッチン-大きな部屋】というダイアグラム配列を基本としていることがわかった。（図1 枠内）

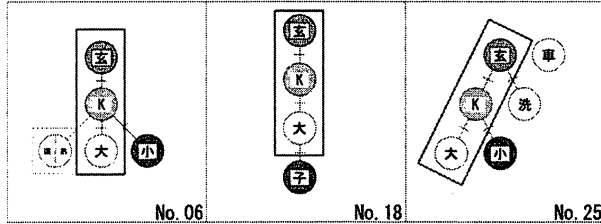


図1. 「基準ダイアグラム」の例

これを基準ダイアグラムと位置づけ、このダイアグラムのみで成立する住居を「単純型」とした。これに対し、基準ダイアグラム以外の部屋が1部屋以上あるものを「副室型」とした。ただし、店舗や鳩小屋(No. 16)など、主要生活空間に入らない部屋は除くこととした。調査した全27住居を分類すると下記ようになる。

※注「大きな部屋」(Tom Oroo)について

多くの住居が主室を上記のように呼称している。リビングダイニングといった呼称はなく、この部屋では就寝も行われている場合も多く、多目的の部屋となっている。食事、作業、就寝等の生活場面が未分化である状況が読み取れる。

単純型：No. 01, No. 05, No. 07-1, No. 07-2, No. 07-3, No. 10, No. 14, No. 15, No. 17, No. 21
副室型：No. 04, No. 06, No. 09, No. 12, No. 13, No. 16, No. 18, No. 19, No. 20, No. 22, No. 23, No. 24, No. 25

3-2-2. 世帯数とダイアグラムの関係

基準ダイアグラムは生活上最低限必要な要素であると捉えられるが、単純型の中にも複数世帯が生活している住居があった。

単純型で複数世帯居住している例は 10 件中 2 件 (20%)
副室型で複数世帯居住している例は 13 件中 8 件 (61.5%)

3-2-3 基準ダイアグラムからはずれるケース

副室型の中には【玄関（倉庫）→キッチン→大きな部屋】の基準ダイアグラムを持たないものがあり、これを特殊ケースとして抽出した。

【玄関（倉庫）→キッチン→大きな部屋】の接続型式を持たない住居： No. 4, 9, 12, 13, 20, 23, 24

3-2-4. 中間領域

玄関から直接2つ以上の部屋へ接続する例はNo. 25しか無く（倉庫や二階など、普段生活において使用されていない部屋を除く）その他24件中23件は、下図のように全てキッチンや廊下、またはバイシン内の2つ目の玄関を軸に複数の部屋や主室へと接続している。二つ目の玄関やキッチンは土足で入る場合も多く、風除室としての一つ目の玄関と完全にリラックスできる室内空間をつなぐ中間領域としても機能していることが伺える。（図2 点線内）

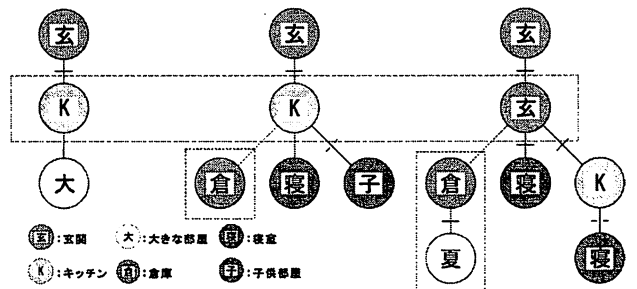


図2. 「中間領域」から主室や副室に展開する様子

これは厳冬期の気温が-30℃にもなるモンゴル特有の間取りであると思われるが、風除室としての玄関だけでは冷気が主室である大きな部屋や寝室に侵入してしまう。その対策として玄関に隣接して第2の玄関やキッチンを設け、主室への冷気の侵入を防いでいると推測できる。また、24件中17件がこの中間領域に当たる部屋で靴を脱いでおり、ストーブを配置している割合も高いため、中間領域までが汚れが許容される領域とし認識されているのではないかと推測できる。

4. 住意識の分析

本章ではヒアリング調査に基づいて、住居内で各生活場面がどの部屋でどのような姿勢で行われているかを明らかにする。

4-1. 多世帯居住について

冬季調査においては夏季調査で対象とした25住居のうち16件を再訪したが、その際に親や兄弟、親戚またはその家族と一緒に暮らしたいかという「多世帯居住について」の質問を行った。

結果、多世帯居住を望まない世帯は16件中13件でしかも別々の敷地で独立して住みたいとの回答であった。ゲル地区住民は基本的には多世帯居住を望んではいず、各世帯が独立して住みたいと考えていることが明らかとなった。しかし資金難や便利な土地の取得の

困難等から一時的に多世帯居住を余儀なくされている世帯も多い。

4-2. 生活行為と部屋の対応

ヒアリング調査を基に、各生活場面がどの部屋で行われているかを集計したのが表1である。「料理」を除く各行為は、「大きな部屋」を軸として生活をしており、副室は大きな部屋を補完する役割を持っている構造が浮かび上がる。就寝は大きな部屋と寝室を両方を用いる例が最も多い。

食事に関しては、キッチンで行う傾向があり、<大きな部屋-主としてくつろぎ>、<キッチン-食事>というように食事をするエリアを意識的に分けている事が伺える。

	ダイアグラム形式	大きな部屋	キッチン	寝室	玄関	複数室
食事する部屋	複室型	4	6			3
	単純型	4	6			0
	複室型+単純型	8	12			3
就寝する部屋	複室型	1		1		11
	単純型	10		0		0
	複室型+単純型	11		1		11
料理をする部屋	複室型	1	12			
	単純型	0	10			
	複室型+単純型	1	22			
団らんする部屋	複室型	7	2	2		2
	単純型	10	0	0		0
	複室型+単純型	17	2	2		2
接客する部屋	複室型	8	1	1		3
	単純型	9	1	0		0
	複室型+単純型	17	2	1		3
化粧する部屋	複室型	3	3	3	3	1
	単純型	9	0	0	1	0
	複室型+単純型	12	3	3	4	1
読書・勉強する部屋	複室型	6	1	2		4
	単純型	9	1	0		0
	複室型+単純型	15	2	2		4

※複数室とは、住居内で世帯ごとに生活行為を行う部屋が2室以上ある場合を指す。

表1. 生活場面と行為を行う部屋との対応の集計

4-3. 各生活場面と姿勢の関係

どの生活場面においても床で行われる例は少なく、意識的に床と距離のある姿勢で生活を行っている。簡易な低い腰掛け椅子や小さなテーブルを持つ住居が多く、食事の際などに家具レイアウトを変更する事例が多く見られた。これはゲルの生活と共通する部分があり、小さな家具をうまく用いて場面転換を行っている状況が確認できた。

	イスに座る	ソファに座る	ベッドに座る	イスとベッドに座る	イスとソファに座る	イスとソファとベッドに座る	ソファと床に座る	ソファと床に座る	立って行う	合計(件)
食事の姿勢	10	2		4				3	1	20
団らんの姿勢	4	4		4						16
読書の姿勢	10	2	3	0						25
接客の姿勢	7	2	1	10		2				22
化粧の姿勢	15	3	1	7						26
読書の姿勢	3	2		10	5	6	1			27
団らんの姿勢	4									22

※合計数は設置した全ての姿勢中、アンケートの回答が得られた場合のものをカウントした為、1件に異なる場合がある。

表2. 生活場面と行為を行う姿勢に関する集計

4-4. 食寝分離

食寝分離を行っていたのは全住居中 33%であった。また同一の住居内においても食寝分離が成立して

いる世帯、成立していない世帯が同居しているケースも25%であった。単純型では10件中3件が分離、副室型では13件中5件が分離、6件が一部分離となった。分離されている場合はキッチンをダイニングルームとして使用し、就寝は大きな部屋や各寝室で行うケースが多いが、キッチンが清潔に保たれダイニングテーブルを窓際に寄せて植木を並べるなど、生活に対する意識が高い世帯で分離が行われている傾向が読み取れた。しかし対象住居全体を見ると限られた部屋数の中で食事の場を分離している世帯は少ない実態が明らかとなった。

4-5. 就寝分離

「単室型」においては、十二歳以上の子供がいる場合でも就寝分離されているケースが一例もなかった。

「副室型」においては該当する11ケース中9件が分離、2件においても一部分離が見られたように、殆どにおいて就寝分離が行われていた。

5. まとめと展望

5-1. まとめ

- ・殆どのパイシンがセルフビルドであるが、間取りとして【玄関-キッチン-大きな部屋】という共通したダイアグラムが抽出できた。

- ・暖房の種類や中間領域など、寒さに対する仕組みが大きく間取りに影響を及ぼしている。

- ・全世帯中4.2%が食寝分離を行っていない事など、各生活場面が混在している。

- ・就寝分離では、「単純型」の住居においては、1世帯も分離していないのに比べ、「副室型」においては該当する全11件において分離が見られることなど、単純型にも複数世帯・多人数で居住している例が見られた。

5-2. 展望

今回の調査では、サンプル数は少ないものの、ゲル地区の住居における住まい方の実態や様々な問題点が明らかとなった。今後も研究を続け、ゲル地区における住まい方の基礎データを収集し、現代モンゴル

における定住型住居の新しいあり方についての考察を深めてゆきたい。

引用参考文献

JICA モンゴル国ウランバートル市都市計画マスタープラン・都市開発プログラム策定調査・最終報告書(要約) 2009

滝口良 「土地所有者になるために:モンゴル・ウランバートル市における土地私有化政策をめぐって」 北方人文研究 第2号 2009